

論文要旨

臨濟禅の思想史的研究

——その形成と展開——

吳進幹（戒法）

本論文は、中国禅思想史上に臨濟義玄（?-866）の禅思想を位置づけ、彼の思想史的背景とその後の展開を明らかにしようとするものである。

臨濟禅に関して従来の研究では、ほとんど馬祖禅の思想を受け継いだものとして解されてきた。しかしながら、現在の視点から見る時、臨濟禅と馬祖禅には相違する部分もあり、再検討を要する。特に臨濟の生きた晩唐は禅宗が大衆化する時代であり、当時馬祖禅が再検討され、そのような時代背景のもとで臨濟も自己の思想を構築したことには注意を要する。したがって、中国禅思想史に臨濟禅を位置づけるためには、臨濟以前の禅思想がいかに関展開したのか、それを臨濟がどのように継承・克服して自己の思想を形成したのか、そして臨濟禅がその後どのように展開していったのかを考察することは極めて重要な手順と言える。なかでも馬祖の提示した「作用即性」説は禅思想史の展開を考える上で極めて重要であるため、本論文は主にこの点に焦点をあてて考察する。

本論文は臨濟禅の思想史的位置づけについて、具体的に前編と後編に分けて考察する。前編「臨濟禅の思想史的背景——馬祖禅の継承・批判・克服——」は、以下の六章から成る。

- 第一章 唐代禅思想の基調——馬祖による「作用即性」説を中心として——
- 第二章 中晩唐転型期禅宗における馬祖「作用即性」説の流行と反省——その総合的考察——
- 第三章 大珠慧海の禅思想
- 第四章 南泉普願の禅思想
- 第五章 百丈懐海の禅思想
- 第六章 黄檗希運の禅思想

第一章「唐代禅思想の基調——馬祖による〈作用即性〉説を中心として——」では、中晩唐転換期における禅思想の展開を理解するために、まずその準備作業として、馬祖禅の核心または馬祖禅の特徴と見なされる「作用即性」説を中心に、唐代禅思想の基調を確認する。第一節「馬祖以前の初期禅宗に見える〈作用即性〉説」では、敦煌文献と伝世資料に示される初期禅宗の「作用即性」説に関する言説について論じる。馬祖以前の初期禅宗には「作用即性」という考え方が既に見られるが、必ずしも重要な位置を占めるのではなかった。第二節「馬祖の〈作用即性〉説」では、馬祖による「作用即性」の悟道論が唐代禅の基調を定め、禅そのものの性格を決定づけたことを確認する。「作用即性」の悟道論に関する考え方は従来の仏教とは全く異なる立場に立ったため、それをいかにとらえるかが新たな問題となった。

第二章「中晩唐転型期禅宗における馬祖〈作用即性〉説の流行と反省」では、『祖堂集』

『景德伝灯録』を主な材料として、「作用即性」説が中晩唐転換期の禅宗においてどのように展開したかを、馬祖禅の影響と継承、およびそれに対する批判・反省という再検討の思想史的文脈において総合的に考察する。本章では、中晩唐転換期禅宗の思想史は馬祖系と石頭系両派の対立軸の展開ではなく、馬祖禅の延長線上に位置づけられることを明らかにしようとするものである。

第三章から第六章までは、前章で論究した禅思想史的背景をふまえ、さらに具体的に個別的事件として、馬祖の弟子大珠慧海・南泉普願・百丈懷海及びその再伝の弟子黄檗希運を取り上げ、彼らの禅思想と馬祖禅の展開過程を論じている。馬祖の唱えた「作用即性」という悟道論が仏教思想史上に革新的・画期的な意義を持ったが、それが広く僧俗に衝撃を与えると同時に、その弊害も生じていた。そこで、馬祖門下から早くもこれに対する批判・反省・克服という再検討の動きが起こるとともに、またそれを克服するために、それぞれに新たな思想が形成されたことを明らかにしている。

以上、禅宗史を灯史に基づく系譜論から脱却し、一世を風靡した馬祖の思想を中心に置き、それが残した影響や問題点を後世の人々がどのように捉え、また、どう対処しようとしたか、という思想史的視点から、臨済の思想史的背景を把握する。

後編「臨済義玄の禅思想とその後の展開」では、そうした思想史的背景をふまえて臨済禅を検討し、そして臨済禅がその後どのように展開していったかを考察する。具体的には以下の三章に分けて考察する。

第七章 臨済義玄の禅思想

第八章 臨済禅の南方伝播と臨済宗の形成

第九章 『臨済録』における臨済宗綱要の形成——「三玄三要」「臨済三句」「四喝」を中心として——

第七章「臨済義玄の禅思想」では、前編で論究した馬祖禅の影響と継承、およびそれに対する批判・反省という再検討の思想史的背景のもとで臨済の禅思想を考える。臨済の禅思想は基本的に馬祖禅を受け継いだものと認められるが、その相違する部分は臨済の生きた晩唐時代の問題意識、すなわち馬祖禅の再検討と関係しており、また臨済はその背景のもとで、自己の思想を形成し、なかでも特に彼の「随处作主」説が注目すべきである。臨済禅は単純に馬祖禅の系譜に位置づけるか、それとも石頭・薬山系の禅に位置づけるかというのではなく、馬祖禅の延長線上において、晩唐の禅宗大衆化にともなう新たな思潮を加味しつつ理解すべきとの考えを論じた。

続く第八・第九章および附論「『臨済録』における〈四料簡〉の形成」では、晩唐の臨済より宋代の臨済宗に到る歴史・思想の展開過程について考察する。晩唐の臨済禅が河北から南方に向って教線を拡大してゆく過程で、臨済宗並びに『臨済録』が形成されており、臨済禅の思想も一宗派として変化していった。これが河南汝州において活躍した臨済下第三世南院慧顛（860-930頃）系統の人々の時代の問題意識と関わっている。また、南院慧顛をはじめとする河南汝州という地方が臨済禅の新たな中心地とされ、後代までその法が受け継がれてゆくことを明らかにする。

以上の考察により、中国禅思想史上に占める臨済禅の位置づけ、また唐から宋に至る禅の歴史・思想の流れの様相が明らかになると考えられる。

本論で扱う範囲の資料では禅宗以外の中国仏教各派の思想、また中晩唐五代転換期の中国社会との関連にまで踏み込むことはできないが、中国禅思想史上における臨済禅の位置づけについて多少なりとも新しい指摘をし得るものと考えられる。